令和５年度　１１月定例会会議録

◎招集年月日　　令和５年１１月１７日（金）
◎開 催 日 時　　令和５年１１月２２日（水）　午後１時３０分～午後３時１５分
◎場　　所　　伊那市役所　庁議室
◎出 席 委 員　　笠原教育長、北原教育長職務代理者、田畑教育委員、黒河内教育委員、原田教育委員
◎出 席 職 員　　三澤教育次長、宮下学校教育課長、北林子ども相談室長、矢澤生涯学習課長、早川市誌編さん室長、小島社会教育指導員、福與指導主事、酒井指導主事、伊藤教育総務係長

１　開　　会

２　あいさつ　教育長

・依然として感染症が続いている中でインフルエンザのことも考えると感染症への対応が大事であり、学校長に向けての言葉をまとめた。
・コロナ禍で最も響いた言葉は、「学校は、家庭の経済的、文化的な凸凹をならす平等化装置」という言葉で、この言葉に出会ったときに学校あるいは教育が本来どういうことを覚悟として真ん中に置くか立ち返る必要を強く言われた、そのように思って受け止めた。
・本質は何か、本来はどうなのか、そもそも何を芯に置いていくのか、そういうことを考えながら、大事にしていること、肝心なこと、子どもの育ちと係わりの中で考えてまいりたい。

３　会議事項

第１　教育長報告

・教育長から資料に基づき報告。
・委員から「今回、内側から中学生キャリアフェスに参加させていただいて、子どもの実行委員と大人実行委員があり、その他にも市役所を挙げての会場の準備や周辺校の皆さんの支援、バスでの送迎も含めて、サポート体制が充実していると感じた。年々参加企業を含めて成熟してきており、さらにどうしていくかということを考えながら、参加させていただいた。」との報告があった。

第２　報告事項

（１）フィンランド視察状況報告【後編】

・田畑委員、黒河内委員から報告

〇黒河内委員

フィンランドから帰ったのが 10 月 15 日ということで１ヶ月以上経ちました。先週 11 月 18 月土曜日には、参加したメンバーが１ヶ月ぶりに集まり、どういったものが学べたか、実際どのようにしていこうか意見交換が行われました。

私が印象に残ったことは２つの柱で、１つ目は森に係り、教育環境の中でも森を敬い森とともに学ぶこと。２つめにアントレプレナーシップ教育、自分のことは自分で決めていくこと。

一方、学校では、今のカリキュラムに新しい何かを加えていくことは先生たちの負担も大きいので、外部からサポートしていく体制が必要ということも一致した意見でした。

また、「アントレプレナーシップ教育」というのは聞きなれない言葉で、個人的に興味もあり調べてみた。配布した資料はフィンランドのものではなく、文部科学省の資料からの抜粋となるが、急激に社会環境変化しているその中でも、新たな価値を生み出していく精神（アントレプレナーシップ）と書かれていた。

新しい環境の中で無かったところから何かを作る、0 を 1 にするような態度であり、そのためには未来創造や課題解決のために必要な知識や技術の他にも、それを発揮する機会、心構えが必要であり、教育によって小さい頃から身につけて欲しいと感じた。

0 から 1 を作り出すプロセスは、探究の学びと非常に結び付くとの記載があり、探究的な学習は課題の設定、情報収集、整理分析、まとめ表現のサイクルをらせん状に繰り返していくことで自らの課題や考えを更新していくものとしている。

フィンランドのアントレプレナーシップの教材にも同じような記載があり、文部科学省の情報だけでも十分と感じた。

○田畑委員

視察した内容を消化するのに 1 ヶ月くらいかかった。

広い観点で気づいたのは、教育は単体でそこに存在するのではなく、教育の前にその国のバックグラウンドや歴史的な背景、住んでいる人たちの思い、どんな人物を輩出していくのかという強い願いがあると感じた。

フィンランド教育は世界一の教育として取り上げられることがあるが、日本には歩んできた土壌の中で育まれてきた教育があり、その中にフィンランドだからこそ育まれてきた教育をどう解釈していくか、もう 1 回見直すという意味でやはり参考にしていく必要性があると感じた。

フィンランドとの違いとして、新卒一括採用という仕組みがない、大学の良い、悪いという概念がない、民間の教育サービスがないことなどがあった。

良い悪いは別にして、フィンランドは隣国との戦いの中で残ってきたエリアで敗戦してない。日本は全く違う価値観を受け入れざるを得ない流れの中で、教育も含めて変えてきたのだろうと感じた。

教育はやはり国策であるし、国の方向性を示すものの一つの大きな基準であると考えたときに、日本の良いところも当然あり、逆にヨーロッパ的な方がいいという考え方もある中で何をどう変えたら良いかを考えるきっかけとなった。フィンランドは小国で人口も北海道ぐらいですが、森林という資源にどのように価値を付けて、ビジネスを展開しながら外貨を稼いでいくかという意味で考えると、教育と国作りに矛盾がなく成立していると感じた。

生涯学習の考え方では、卒業がない、壁がない、区切りがない教育、求めればどこまでも勉強できるところが異なり、日本では公民館活動はだんだん高齢化する中で、学び続けたい人が学べる環境は本当に何なのか、生涯学習という意味ではやはりまだまだ深掘りしながら広い意味で社会に学び、社会で学べる、そういう大きな枠組みの中で、教える側もまた教わる側も、もっと視野を広げていろんなことが学び続けられる環境をどう構築するかということが教育課題の解決のひとつになると感じた。

・委員から「フィンランドの定年は 40 歳とお聞きしているが、40 歳はとても若い。次の職業は勉強していないと就職できない、義務を果たすことができないとお聞きしているがどうか。」との質問があり、田畑委員から「今回のテーマは教育であり、そのことは確認してない。学び続けることは一つの権利であり、どこまでの学びを深めたかが評価の基準となっている。」旨の回答があった。

・田畑委員から「大学生や高校生に将来なりたい職業は何か尋ねると、日本で人気のユーチューバーではなく、教員と言っていたのが印象的だった。」旨の補足があり、委員から「教員を目指すことが多いとのことであるが、資格はどうか。」との質問があり、黒河内委員から「教員の場合は大学院の修士課程までは必須となっている。その他の職業の資格や試験が日本とどう違うかはお聞きしていない。」旨の回答があった。

（２）教育委員会の事務の管理及び執行状況の点検及び評価報告書について

・教育次長から資料に基づき説明

（質問・意見なし）

（３）伊那市文化財保存活用地域計画（案）パブリックコメントについて

・生涯学習課長から資料に基づき説明

・教育長から「パブリックコメントについて、市民の皆さんは何を見て意見を出すことになるか。」との質問があり、生涯学習課長から「素案を見ていただき、意見をいただく。」旨の回答があった。

・委員から「例えば、長野県の図の中で伊那市のところの線は道路なのか鉄道なのかわかりにくいところがあるがいかがか。」との質問があり、生涯学習課長から「確かにわかりにくいところがあるので、その辺の注釈を考えたい。」旨の回答があった。

・委員から「パブリックコメントではどんなコメントを望んでいるか。また、一部の専門家にはどういう形で情報を発信していくのか。」との質問があり、生涯学習課長から「基本的には特定の分野の方だけでなく、広く市民の皆さんにご意見いただければと考えている。専門的な知識がある方には、内容が事実と異なるなどご指摘いただいたり、構成など含めてご意見いただいたりするようお願いしたい。」旨の回答があった。

・委員から「実際に細かいところまで読んで、例えば地図が違うとか、そういう意見が出てくるのか。誰もコメントくれないこともあるか。」との質問があり、生涯学習課長から「場合によってはそういうことも有り得る。」旨の回答があった。

・委員から「市民からの意見は、例えば『地域のことに係り不確かなところがあるからここについての意見はどうか』となれば良いが、なかなか 150 ページの資料を読んで意見を出す人はいないと思う。制度上、形として行うイメージか。」との質問があり、生涯学習課長から「行政として計画を出すことになるので、極力、いろいろなところから意見いただく必要があると思う。最終的に見落としている部分が見つかれば大変ありがたい。」旨の回答があった。

・教育長から「パブリックコメントの周知はどのように行うか。」との質問があり、生涯学習課長から「市のホームページ等に掲載し、プレスリリースし報道機関にも取り上げていただく予定である。」旨の回答があり、教育長から「市民の皆さんに読んでいただけるように、イーナちゃんのガイドをいれるなどの工夫をしている。委員のご指摘にもあるような内容については、相当細かい調査結果等も紹介されたり、議論しながらつくられたりしており、そうした点もご指摘いただければさらに高めることができるので、この機会を生かしていただきたいと思う。」旨の意見があった。

（４）人権同和教育事業について

・社会教育指導員から資料に基づき説明

・教育長から「えがおの配布状況については如何ですか。」との質問があり、社会教育指導員から「配布状況は現在調査中ですので 12 月には報告できる見込みである。」旨の回答があった。

（５）市誌編さん事業の進捗状況について

・市誌編さん室長から資料に基づき説明

・委員から「公募型プロポーザル方式で、中高生にも読みやすいものにしたいから表紙や背表紙のデザインも大事な要素としている。今の子どもたちは与えられたタブレットを使って検索しており、表紙や背表紙のデザインを素晴らしいものにしても、なかなか手に取らないと思う。一方、地域のことは絶対関心を持つと思うので、オンラインで調べたときにそれが出てくるかどうかは最も重要であり、読んでもらって初めて価値があると感じる。もちろん図書館には冊子を置いて欲しいし、それは読みやすいものであって欲しいけれども、オンライ

ン上でわかりやすく整理されていることが大事で、そうしたことができる業者を選んでいただきたい。」旨の意見があり、市誌編さん室長から「今までの市町村誌には索引がなく、自分が調べたいものを見つけにくいことがあった。委員ご指摘の部分は、業者選定の要素として考えたい。」旨の回答があった。

・委員から「索引は単語レベルとなるが、検索エンジンとしてデータベースから内容を引くことができる、AI を使って論文的につくれるようなシステムもあると思うので、そうした技術に明るい業者であると良い。」との意見があった。

・委員から「たまたま高遠町誌の人物編に私の先祖の記載があり調べたことはあるが、1 ページ目から全部読むということはなかなかないと思う。例えば、調べようと思ったときに、その場で調べられず、図書館に行ったら休みだったり、カードを作る必要があったりすると、何を調べていたか忘れてしまうこともある。」との意見があり、教育長から「販売用の冊子については、実際に求められる機能をどう持つかというところにも繋がる。デジタル化されたものの使い勝手や紙で作ったものが使いやすさという点で、どう機能化されていくかということのご指摘であるように思う。内容を整理して、プロポーザルに臨んで欲しい。」との意見があった。

・市誌編さん室長から「紙だけれども使いやすいという趣旨は難しい部分もあるが、図書館の場合、全員がタブレットを使うことにもならないので、紙も必要である。」との補足があり、委員から「最低限のこの冊数は必要と思うが、同じ時間と労力があったら、オンライン上で、より多くの人が、未来永劫使える、その議論に時間とお金を集中した方が良いと思う。紙媒体は割り切りが必要であるが、あった方がいいと思う。」旨の意見があった。

・教育長から「そこまで考えているかどうかは別にして、索引や全体索引が整ってくると、実際に紙でも行きつきやすくなると思う。限られた資源を有効に、未来に繋がるようにすることは大事なご指摘であり、参考にしてほしい。」との意見があった。

・委員から「蔵書として必要な冊数を含めて、必要な冊数をつくるのに必要なロット数はどの程度か。」との質問があり、市誌編さん室長から「今後の作業を進めていく中で、業者さんとのやり取りをしながら検討していく。発注数は、100 冊単位ぐらいになると思う。」旨の回答があった。

・委員から「デジタル版の販売の予定はあるか。」との質問があり、市誌編さん室長から「デジタルをどのようにしていくかについては早く進めていくこととしている。技術は進んでおり仕組みはすぐできるが費用はかかることもある。映像やデジタルアーカイブがあると伝え方も広がるので考えていきたい。」旨の回答があった。

・委員から「市誌編さんは何年に一回ではなく、1 年毎も可能になると思う。」との意見があり、市誌編さん室長から「何十年に 1 回作るのではなく、毎年まとめる、その時点でやっていくことができれば、20 年先 30 年先はもっと楽にできるし、その都度、振り返りもできるので、そうしたことにも含めて取り組みたい。」旨の回答があった。

（6）１２月以降の文化施設の行事日程について

・生涯学習課長から資料に基づき説明

（質問・意見なし）

（7）共催・後援について

・学校教育課長から資料に基づき説明

（質問・意見なし）

(12) その他

・特になし

４　その他

（１）１２月の日程について

（２）１月以降の主な行事予定について

・三澤教育次長から⑴から⑵まで、資料に基づき説明

（質問・意見なし）

・委員から「12 月 18 日の小中学校授業作り研究会は、それぞれの学校や担当の研修会であり、私達はその様子をうかがう形式となるか。」との質問があり、指導主事から「今年は小中の中学校区単位で連携を深めていこうということにしている。教育委員の皆様にはそれぞれのグループに一緒に入っていただくことを考えている。」旨の回答があった。

５　閉　会